

第10回海岸工学国際会議の運営経過と諸行事

寄 書

堀 川 清 司*

永年にわたっての懸案であった、国際会議「第10回海岸工学会議」を無事盛会裡に終了しえたこと、これは直接の当事者であったわれわれにとっては、昭和41年中の最大の行事を完了したことを意味していた。すでに3ヵ月有余を経過したいま、当時のあわただしかった日々が遠い過去のもののように感ぜられる。

この国際会議がわが国において開催されるに至った経緯ならびに、諸準備の模様については、組織委員長である本間 仁教授により述べられているので、ここには会議当時の模様を回顧してみることにする。

1. 会議の模様

(1) 9月4日(日)

今日は会議開会の前日である。会場である東京プリンスホテルの借用は、今日よりの契約となっているので、物品の搬入から開始された。組織委員会事務局である、東京大学工学部土木工学科教室内会議室に集積されているもろもろの物品は、われわれの研究室所属のステーションワゴン、その他の車によって運搬された。会場には続々と事務局担当者が参集・各部屋への物品の配置、当日午後6時より開始される受付場所の設置に、忙しく立ち働く若人の活気が満ちあふれてくる。それぞれの持場に対する説明が不十分ではなかったかの危惧も消し飛ぶほどに、余裕をもって受付開始の時刻を待った。一方国際水理学会(I.A.H.R.)の海岸水理委員会が午後4時より事務局の一室にて開催され、委員長 Johnson 教授他委員、ならびにオブザーバー計7名、それに副会長本間教授が列席した。議題は専ら海岸工学会議と本委員会での活動との関連ならびに協力体制に向けられ、熱心な協議が行なわれた。やや曇りがちであった空は夜に入って雨になり、すっかり都塵は洗い流されたごとく、東京プリンスホテルの灯火は美しくまばたいていた。午後6時より開始された出席者受付の事務も9時には扉を閉ざした。さすが緊張の連続だった事務局員もホッと一息入れ、明日よりの作業をより円滑にするにはいかにかすべきか、若干の討論を行ない、それぞれ家路についた。

* 正会員 工博 東京大学助教授

(2) 9月5日(月)

いよいよ会議当日である。事務局員の集合は午前8時と定められている。早速に受付事務の開始、またその他のサービス業務も活動を始めた。筆者等はサービスに努める一方、旧知の友との再会を喜び合った。やがて開会式の行なわれる時刻である。3階の受付所より2階のSunflower Hall に歩を移し、準備の進行状況を見て廻る。午前10時、出席者のうち外国人は同時通訳用のレシーバーを入口にて受け取り、思い思いの位置に着席。壇上には本間委員長、O'Brien 海岸工学評議会会長をはさんで、篠原土木学会会長、Johnson 教授が着席。中央大学林 泰造教授の英・仏語による明解な司会のもとに、本間、O'Brien、篠原三氏からの挨拶が行なわれ、会議の幕は切って落された。ついで前土木学会会長岡部玉郎博士により、「日本における埋立事業について」、また本間教授により「日本における海岸漂砂の研究について」の特別講演があり、多大の感銘を与えた。漸次休憩の後に「名古屋港高潮防波堤建設工事、その1」が上映され、日本の海岸工事の雄大さを特に外国人出席者に印象付けたことであろう。

午後は2時より Sunflower Hall と3階のB室に分れて一般講演が開始された。筆者は Johnson 教授と前者の会場において司会を務めたが、時間の配分には相当に神経を使った。特に日本人の講演者に対してはひとしおであった。

午後6時より土木学会会長主催の懇親会を開催。まず

出席者受付風景





は第一日の無事終了を祝し、かつは出席者相互の親密度を深めた。予定の一時間はまたたく間に過ぎ、しばし語らいは続けられていた。

(3) 9月6日(火)

会議第2日目。今日は一日中講演があり、しかも会場は1階のA室とC室、3階のB室と3ヵ所に分れ、その間に他の国際会議の会場をはさんだ形となり、何となく不便である。しかもA室とC室は隣り合わせ、その隔離の設備不十分のために少しさわがしい。それでも司会者、講演者、討議者、会場係、それぞれが雰囲気慣れてきた感じが認められた。プログラムに搭載されながらも欠席者が出たため、比較的に時間的な余裕が出てきた。

受付事務は昨日で一応終了したが、何かと事務局への申し出が続いている。論文要旨を受け取っていないとか、会議後のTourの旅費を一部返却せよとか、または登録料未払者数人がいる等々。なれない外国語をあやつっての応答は、なかなか御苦勞なことと思われるが、てきばきと、また主張すべきは主張してやまぬ若手の心意気に感心する。正午には海岸工学研究評議会が開催され、本間教授出席。その際O'Brien会長が行方不明、やむなくWiegel副会長の下にて会議を開催された由。

本日A室での最後は筆者らの論文であった。終了後も数人の研究者と討議し合ったが、引き続いて行なわれる東京都知事レセプションの準備にやや気がせく。銀座東急ホテルにて東京都渉外課の方々と打ち合せ後、会場準備状況の下見、知事ら東京都出席首脳部への挨拶と飛びまわるうちに、続々と外国人を主体とした招待者が到着する。ハイヤーでの送り込みがまずまず順調に行っているようだ。やがて東知事の挨拶あり、思い思いに歓談がはじまる。一時間半の予定も瞬時のごとく、都関係者からは自然に送り出すよう尽力されたいと要請される。まずは成功であった。その後はおのおの思い思いに銀座方面に散って行った。

(4) 9月7日(水)

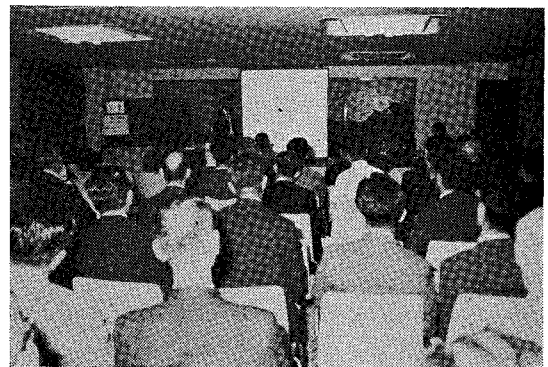
今日から再び2会場になる。発表演文数16編のうち日本からのものは実に11編にのぼったが、連日の講演会にやや疲労を覚える。12時ないし12時20分に会議が終了したときは、さすがにホッとした気持ちになる。午後は市内見物に出るからである。ゆっくりと昼食をとったわれわれ関係者は、少し早めにホテル入口に集合する。市内見物に参加する人数の把握には、われわれはかなりの努力を払ったつもりである。あらかじめ参加者の有無を確かめ、かなりの余裕を見込んでバス3台を予約しておいた。そのバスの到着が遅れ、気をもんだ場面もあったけれども、いざ乗り込んでみると、たちどころに満員の状況で、あぶれる人も出るのではないかとひやひやさせられた。幸いきわめて効率よい乗客数にて、一路高速道路を代々木のオリンピックプールに向う。かくいう筆者も初めてであるが、この施設をこの機会にと参加した日本人がかなりの数にのぼったようである。代々木の森を後にしてからは、市街地を経て宮城の桔梗門付近で小休止・お茶の水、上野を経て浅草雷門に至り、観音堂を拝して、東京プリンスホテルに帰るルートを通ったが、ガイド嬢の機知あふれる説明に、結構皆楽しそうであった。いよいよ明日一日となった。

(5) 9月8日(木)

会議最終日を迎えた。筆者は午前中は事務局員としての事務処理をすべく、事務局にて時間を過す。本日夜に行なわれる予定のFarewell Partyの予約を締切り、テーブル指定の作業の最中になって、参加を強硬に申込み者が数人ある。もっと早く申し込んでくれればよいのにと思いつつ、あっさりと断わる。

各会場とも、予定の時刻には無事全部の論文発表が終った。ふり返ってみると、特に目新しい論文はなかったとの評を聞くが、確かにそうであろう。しかし学ぶべき所は多くの論文に見出すことができたし、また誰がどの

第2会場の講演者と参加者



ようなことを研究しているか知ることでもできた。このような努力の累積があってこそ、学問、技術の進歩が期待されうるのであろうし、少なくとも一歩一歩着実に前進を続けている証左でもあろう。その他会議の運営に当たっての司会者の態度、また論文発表者の周到な準備の上にとった発表態度等、われわれは多くのものを学びえたと考える。今後ますます国際場裡に活躍せねばならぬわれわれとして、語学力の増強とあわせて、大いに身につけねばならない事柄といえよう。特に多くの若手研究者が国際会議の雰囲気に関し、それに慣れ、かつ恐れず、やがては存分に国際人としての手腕を発揮する、その素地を養ってくれたものと思うと、この会議の成果は非常に大きかったといっても過言ではあるまい。

いよいよ最終行事である Farewell Party である。筆者らはやや早めに会場である 帝国ホテルの Peacock Room に到着、ホテル側と打ち合せたり、パーティーの進行についての交渉に時を費す。まず記念写真を撮ることとするが、何しろ出席者総数は 160 名余におよび、かつ多数の婦人達が列席とあって、その配列には一汗かく。さて、パーティーの開始を宣言せねばと、司会者の席にあたふたとかけつけ、いざメモを讀上げようとしたが、メモを紛失したことに気がつき、大いにあわてた。何とか辻褄を合わせて席に帰る。しみじみと一人何役も兼ねるのはいけないと悟る。食事の進行にともない、獅子舞のアトラクシヨに皆興じ、そろそろパーティーを締めくくろうかと再び司会の席に立ったとき、再び難題をもちかけられた。すなわちフォークソングを歌ってはとの提案である。やむなく事務局の若い女性達を呼び集めての合唱を皮切りに、アメリカの Eaton, O'Brien 両氏の合唱、東北大岩崎敏夫教授、フランスの Mah'e 氏と終始なごやかな雰囲気に関わられて行った。閉会を宣してからもおしばし帰途にもつかず、ごったがえす人々の群の中から、会議の成功を祝し、再会を約す多くの友の

Ladie's Programme
(人形づくりを楽しむ)



温い友情に、ひとしお喜びが溢れてきた。つぎつぎと出席者は去り、最後まで残った本間委員長と、盛会裡に会議の全日程を終了しえた喜びを分かち合いながら、帝国ホテルを後にした。一まず東京 プリンス ホテルに帰り、しばし談じて帰途につく。

2. Ladie's Programme

会議が行なわれている一方、Ladie's Programme と称して特に外国人出席者の夫人達のために、貸切りバスによる都内見学が行なわれた。外国人 30 数名に対して日本側は 5, 6 名という少なさであったが、ガイド嬢および見学先の人々の協力によって、全体が非常によくまとまり、国際親善の実をあげるにまずは成功であったという。以下は付添いとして参加した事務局員(間宮、次田、長谷川) 3 人の報告をとりまとめたものである。

(1) 9月5日(月)

午後2時東京 プリンス ホテルを出発、バスは一路明治神宮に向う。神宮では庭園を觀賞、お払いをする。ついで代々木の小沢人形学院を訪ねる。院長の説明を聞きながら、美しい日本人形が見るうちに見事にでき上って行くのに驚きの目を見張る。この後各自も材料をあてがわれ、簡単な一寸法師の人形をこしらえ持帰ることになる。皆良いおみやげができたことと喜ぶ。午後5時すぎ、ホテルに到着、無事プログラムの第一日目を終了。ちなみに今日は外国人だけのグループであった。

(2) 9月6日(火)

集合時刻 10 分前、ホテルのロビーには早くもこの日のプログラムに参加の婦人、子供が集まり、歓談の風景がみられる。参加者 30 余名、バスは 9 時半出発、上野に向う。途中ガイド嬢の説明では物足りないと思っか、何人かは皇居前での臨時停車を希望、写真を撮る。

Ladie's Programme
(バーベキューを楽しむ)



やがて上野の裏街へとバスは入り、目的地黒門会館に着。黒塀で囲まれた純日本式家屋であり、普段は花柳流日本舞踊の稽古場として使われている由。つぎつぎと衣装を付けた踊り手達が登場、合い間合い間に師匠の解説をはさみ、ショーは続けられる。ガイド嬢の必死の通訳も追いつかないほどのスピードで語られる説明にうなづいたり、感心したりしていたのは多く、日本側婦人のようであった。日本舞踊に使われる各種小道具の使い方などについて説明あり、引き続いて日本古謡の「さくらさくら」や民謡「会津盤梯山」、「そうらん節」の舞踊がある。最後に花嫁衣装の帯の着つけが示され、一同「美しい」と目を見張る。中には一緒に写真をと希望する者も。長い間、慣れない畳に坐わらされたのは一同閉口の様子だが、日本茶と和菓子にそれぞれ日本の味を楽しんだようである。

再びバスは走り、目白の椿山荘に向かう。昼食までの時間を思い思いに美しい庭園で過した後、いくつかのテーブルを数人ずつ囲み、バーベキューの昼食が始まる。日本側婦人を代表して堀川夫人から歓迎の辞が述べられる。それぞれのお国ばなしに耳を傾け、たどたどしい英語で合鍵をうちながら日本側婦人も親善に努めている。バスは椿山荘を出ると、丹下健三氏設計になる東京カトリックチャーチで一時停車、そのおごそかな静けさに一同、感動の一瞬を過した後、午後3時半無事ホテルに帰着。

(3) 9月8日(木)

今日はSONYを見学というので、3人の男性参加者も加わり、午前10時半ホテルを出発。SONYの会社と製品の概要についてスライドを用いての説明があった後、テレビ工場を見学。特に陳列室では、最新のテレビジョン、ステレオ等に関心が集まり、製品の価格をメモする夫人が多い。予定より少しく遅れて昼すぎに、いよいよ最後の訪問地、八芳園に到着。天ぷらに舌鼓をうち、また琴に合わせての日本舞踊を觀賞する。ついで生け花や、あづまや風の茶室でのお茶のお手まえ。中には両者について相当にくわしく、専門的な質問をする夫人

もある。美しい庭園と相まって、日本情緒の一端を満喫してもらったと確信する。ようやく全体が慣れはじめ、なごやかな会話がとり交わされるようになったのは、ホテルへの帰りのバスの中であった。

3. 見学旅行

会議の終了した翌日、すなわち9月9日(金)から参加者を募った上で、以下の3コースの見学旅行が行なわれた。筆者は会議の終止末に従事する必要から、いずれのコースにも参加できなかったが、見学受入れ先の好意ある諸準備と、日本側参加者、協力者の並々ならぬ御努力によって、無事その全日程を終了しえた。これらの見学旅行によって多くの外国人参加者は、幾つかの海岸、港湾工事の状況、研究機関の活動状況を見、大いに認識を新たにしたことであろう。それに加えて、ほどほどに加味された観光の企画に、日本の美しさの一端を把握してくれたことと思われる。

(1) 見学旅行 No. 1

(9月9日より9月11日)

横浜港、運輸省港湾技術研究所、神奈川県江ノ島の湘南ヨットハーバー、国立防災センターの観測塔(平塚市)、箱根、河口湖、城山ダム

(2) 見学旅行 No. 2

(9月9日より9月12日)

京都大学防災研究所、京都、奈良、大阪、大阪市立大学水理実験場、神戸港

(3) 見学旅行 No. 3

(9月9日より9月14日)

横浜港、運輸省港湾技術研究所、神奈川県江ノ島の湘南ヨットハーバー、国立防災センターの観測塔(平塚市)、箱根、名古屋港高潮防波堤、京都大学防災研究所、京都、奈良、和歌山工業港、大阪、大阪市立大学水理実験場

OUTLINE OF COASTAL ENGINEERING IN JAPAN

Guid Book to the Tenth Conference on Coastal Engineering

標記の図書は昨年9月第10回海岸工学国際会議が東京で開催されたのを機会に国内組織委員会より出版されたもので、海岸工学の現状をわかりやすくとりまとめられてあります。ご希望の方は土木学会へお申込み下さい。

体 裁：B5判 142ページ

定 価：700円 送 料：100円

申 込 先：土木学会編集課